



■ 第3回 SPARC Japan セミナー 2014 (オープンアクセス・サミット 2014 第1部) 「「オープン世代」の Science」

2014年10月21日(火) 学術総合センター 2階 中会議場 参加者:76名

オープンアクセスウィークにあわせ開催された2014年度第3回 SPARC Japan セミナーでは、「「オープン世代」の Science」と題し、狭義のオープンアクセスを越え、オープンアクセスを使う「ユーザー」側の活動に焦点をあてた企画を立案いたしました。広がりつつあるオープンアクセスやウェブの発達によって、すでに大学や研究機関という組織にこだわらず、自らの興味に従って研究をする人たちが登場しはじめています。いわば趣味で研究する人たちですが、その完成度は一部では職業研究者を凌駕しています。「野生の研究者」とでもいべき人たちの存在は、既存の学術機関の在り方、存在意義に大きな問題提起をしていると言えるでしょう。

本セミナーでは、既存の研究機関や職業研究者という枠を超えた研究活動、あるいは研究支援活動を実践する5名の方々にご講演をいただき、議論を深めました。研究の在り方が今まさに変わりつつある、その息吹を感じるとともに、今後の研究体制の在り方について、議論が白熱しました。

セミナー概要は以下のとおりです。当日の配布資料含め詳細は SPARC Japan の web サイトをご覧ください。
(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20141021.html>)

講演

概要説明

土出 郁子(大阪大学附属図書館)

オープンアクセスはこの10年ほど、理念的政策的な面に焦点が当てられているが、その一方で若手の研究者や学生が日常的に接している Web ベースの文化では、オープンなコンテンツ、不特定多数とのやり取り、クラウド環境による資源共有などが当たり前の形で行われるようになってきた。これらの行為は学術研究の世界にも当然のように波及する。伝統的な学術コミュニケーションや学問的枠組みから、学術研究の成果だけでなくプロセスもどんどん外にはみ出していき、その部分こそがオープンアクセスの理念を現実のものとしているとも言える。

翻って、伝統的な学術コミュニケーションの担い手であった機関(大学)やその図書館、学会は、このはみ出てきた部分に対して何ができるだろうか。答えは、まだない。何が必要なことかを自分たちで見極めていかなければならない。本セミナーでは、「何が起きているか」を紹介するのがひとつの目的である。今日の会が皆様にとってもエキサイティングで刺激的なものになることを期待している。

Alternative な生命探究の場としてのバイオメディアアート

岩崎 秀雄(早稲田大学理工学術院)

「生命(性)とは何か」という問いは、古来より芸術の主題となっている。ダリが 1957-58 年に発表した作品「Butterfly Landscape」では、当時解明されたばかりの DNA の二重らせん構造がモチーフとして取り入れられている。切り絵作家でもある岩崎氏は、2007 年より早稲田大学において、生命美学のプラットフォームである「metaPhorest」¹ を立ち上げた。「metaPhorest」に芸術家が長期滞在し、生命にかかわるアートを作成する。「metaPhorest」は生命科学の実験、製作、研究の場でもあり、生命学者、学生と実験環境、セミナーを共有する。これにより、さまざまな作品が誕生している。

「metaPhorest」において芸術家は単に生命科学の知見や材料を利用するだけではなく、自らの内発的動機に基づき研究を行う。芸術家の視点は、生命科学に新たな光をあてることにも



¹ metaPhorest <<http://metaphorest.net/>>

つながっている。作品作成のプロセスそのものも芸術作品となる。研究は表現行為の一部として位置づけられる。ラボ(実験室)がアトリエとなり、アトリエがラボとなっているのだ。このことは、科学と芸術が入れ子構造であることを実感させる。自然の一部である人間の営みである芸術は、自然を対象とする科学の一部分であるが、科学は芸術の一部でもある。科学と芸術は相互批判、相互参照しながら対峙しているメビウスの輪なのだ。

芸術と科学の垣根を超え、芸術家と科学者の区別も超え、DIY(do it yourself)からDIWO(do it with others)へと広がりつつある生命美学は、まさにオープンアクセスの精神そのものなのだ。

コンテンツとしてオープンに発表される研究活動について - ニコニコ学会βなどを通じて

山田 俊幸 (明治大学米沢嘉博記念図書館)

論文や研究発表は研究者だけではなく、普通の人にとっても面白いものである。一つの面白いコンテンツとして見る研究や論文について発表したい。

もともと大学図書館員であった山田氏は、雑誌の受入業務中に、世の中には多くの面白い論文があることに気付いた。そこでTwitterとCiNii ArticlesのAPIを用い、Twitterで話題になっているキーワードに関する論文を紹介するサービス「論文ったー」²をリリースした。普通の人には少し縁遠く思える論文でも、話題のテーマに関するものであれば少し身近になる、そこに面白さがある。現在、論文ったーのフォロワーは6,000人以上にのぼり、その多くは研究者ではない人と考えられる。論文は普通の人にとっても面白いのである。

また、山田氏はニコニコ動画データの分析・研究を趣味で行い、そこからニコニコ学会βの運営等にも参加している。ニコニコ動画の中でも多くの電子工作やプログラミング等、技術・研究関係の動画が30,000件弱、8,000人以上のユーザーから投稿されている。そこでは技術的な新規性以上に表現や見せ方の工夫が面白がられている。

2007年に第1回が開催されたニコニコ学会βには第一線の研究者による「研究100連発」と、公募型の「研究してみたマッドネス」という二つの発表方法がある。前者は1時間で5人の研究者が自身の行なってきた研究を1人20ずつ、計100個発表する企画である。10~20



² 論文ったー(@ronbunter)

Twitter <<https://twitter.com/ronbunter>>

年間の研究成果を数分で紹介するうちに発表者個人の姿も見えてくる、エンタメ性の高いものである。「研究してみたマッドネス」は10~20人が3分程度の発表をし、その中から審査員とニコニコ生放送のアンケートで対象を決める。中にはAKB48の公式イベントに呼ばれたり、海外のイベント等でも使われるようになったりした研究もあるという。

これらの発表者の4割が学生で、他に若干の教員もいるものの、残る半数は研究者以外の社会人、趣味で研究をする人たちである。もともと多くの人々が研究に類する行為をしていたものの、職業研究者以外は可視化されていなかった。それがソーシャルメディアによって可視化された。気軽に研究・発表できる手段ができたことで、今後研究はカジュアルにできるもの、一億総研究者時代が来るのかもしれない。

国内発の国際的総合科学学術誌 Science Postprint, SPARCから始まりSPARCに至り...

竹澤 慎一郎(ゼネラルヘルスケア株式会社)

竹澤氏は生命科学分野で博士号を取得したのち、ベンチャー企業などを経て2007年にゼネラルヘルスケア株式会社を創業した。竹澤氏は同社において、2012年のSPARC Japan セミナ



ーに着想を得て、オープンアクセスジャーナル「Science Postprint」³を創設した。その背景には、アジアには、Nature、Scienceのような学術研究のインフラとなる総合学術雑誌が存在しないという現状がある。

2050年にアジアは世界の学術論文の半数を生産するまでに拡大し、その市場規模は約5000億円に達すると試算されている。しかし、日本においては、学術論文誌は学会が出版すべきものとの固定概念があり、また既存のNatureのような雑誌のブランドが強すぎたため、今までだれも総合学術雑誌を創設しようとは思わなかったからだという。竹澤氏はオープンアクセス誌「Science PostPrint」により、日本、アジアの学術インフラを作ることを目指している。

現在「Science PostPrint」は、資金や人材の不足や、「ビールズリスト」⁴にノミネートされるなど困難にも直面しているが、生命科学論文のデータベースPubMedに収載

³ Science Postprint <<http://www.spp-j.com/>>

⁴ コロラド大学デンバー校の図書館員、Jeffrey Beallが作成しているリスト。オープンアクセスの学術雑誌出版をうたっているがAPC(論文加工料)搾取の疑いの高い出版社のリストとして知られる。

Beall's List <<http://scholarlyoa.com/publishers/>>

され、インパクトファクターを取得することにより、こうした困難を解消したいと考えている。将来的には、出版後査読、顕彰、査読協力金の支払いシステムの導入等を計画しており、目標の実現にむけて精力的に事業を展開しつつある。

「若手アカデミー」というプラットフォーム

駒井 章治(奈良先端科学技術大学院大学)

駒井氏はまず、「研究」をめぐる状況の変化について概観した。研究活動には 3 つの M がキーワードになる。Management、Mentorship、Motivation である。研究者は一様に、興味のある様々なことをしたいのに時間がなあと感じている。研究支援では成果を問う声が強くなり、従来研究室で行われていた教育や人財開発(考える楽しさの共有を含む)は、若手の任期制などにより困難になっている。研究者になる様々なルートや機会があってよいはずだし、研究不正は締め付けばかりしてもなくなる。このような状況にあって、研究者同士のネットワークがますます必要となっている。

駒井氏は 2011 年 11 月の発足時から 2014 年 9 月末まで、日本学術会議内の若手アカデミー委員会⁵の委員長を務めた。この若手アカデミー委員会は日本国内の若手研究者のネットワークである。世界各国で若手研究者の会が発足し、「Global Young Academy」というネットワークが形成された。この動きを受けたものでもあり、GYA の一員としても活動している。国内学協会の若手の会にも参加を呼びかけており、総合学術や学際領域など、単独の学会で取り上げることのできないテーマをとりあげたり、高校生や学生と未来の研究を考えるワークショップを開催したりしている。また、これらの取り組みから得た知見をもとにシニアのアカデミー連合に対してコメントすることもある。

学術研究環境の変革期にあって、世界の状況を知る必要があると駒井氏は考える。若手と従来の研究、研究者とをつなぐインターフェイスをつくることによって、様々な活動を表出させ、科学が特別な活動として孤立するものでは



なく、普通に身近に捉えられる世界を目指したい、という趣旨を、「科学を文化に」という言葉で表現して発表を締め括った。

⁵ 若手アカデミー委員会
<<http://www.youngacademy-japan.org/>>

アカデミア外における知のオープンアクセスがもたらす未来

堀川 大樹 (慶應義塾大学 SFC 研究所)

研究者、プレイヤーの側から、アカデミア外の動きにフォーカスしつつ、情報をオープンにするとどうなっていくのかという話をしたい。



堀川氏は大学からは給料を貰っていない、フリーの研究者である。アカデミックな話をブログ等オンラインで無料提供しつつ、メールマガジンやグッズの販売でマネタイズしている。

オープンアクセスは活動者をエンパワーする(力を与える)。ファンや仲間を増やしやすく、情報が集まりやすくなる。寄付など資金も集まりやすくなり、結果として自身の活動がますます促進される。それを実践しているのが「バイオハッカー」と呼ばれる人々である。アカデミアの外で生物学研究に従事する彼らは、オープンなバイオスペースで、プロジェクトを立てて研究している。情報共有の意識が極めて高く、例えば BioCurious⁶ という海外サービスがあり、情報や仲間が集い、クラウドファンディングで資金を集めベジタリアンのための人工合成チーズを作るプロジェクト等が動いている。

日本でも似た動きがある。例えばニコニコ学会 B であった「昆虫大学むしむし生放送」という企画では、堀川氏を含め遠方にいた出演者の旅費をクラウドファンディングで集めた。資金は主婦やニートからも集まった。それは出演者がブログを持つ等、自身の情報をオープンにしていた人々だったからで、そうでなければ必要額は集まらなかったらう。

研究者がブログや SNS を持って情報発信することもオープンアクセスの実践である。コストゼロで情報を発信し、評価を集め研究にフィードバックできる。氏は「むしプロ」⁷ というブログや「クマムシさん」⁸ という Twitter アカウントを運営し、研究に広く興味を持ってもらえるような記事や、面白おかしい、でもちょっとためになる Tweet を心がけ発信している。そこからぬいぐるみの販売やメールマガジンの購読、あるいは本の出版につながっている。

知の無料提供が評価の獲得につながり、人的・資金的リソースを得て、独立した研究活動を支えていくことになる。より多くの人を研究の世界に巻き込むことにより、知の格差を縮小し、オープンアクセスをさらに促進させ、人類の研究活動の総和も増大していくだろう。

⁶ BioCurious <<http://biocurious.org/>>

⁷ むしプロ <<http://horikawad.hatenadiary.com/>>

⁸ クマムシさん(@kumamushisan)

Twitter <<https://twitter.com/kumamushisan>>

パネルディスカッション

モデレーター:佐藤 翔(同志社大学)

パネリスト:岩崎 秀雄(早稲田大学理工学術院/山田俊幸(明治大学米沢嘉博記念図書館)/竹澤 慎一郎(ゼネラルヘルスケア株式会社)/駒井 章治(奈良先端科学技術大学院大学)/堀川 大樹(慶應義塾大学 SFC 研究所)/榎木 英介(近畿大学医学部)

パネルディスカッションでは、研究資金、助成のあり方、雑誌論文と査読、バイオハッカー(DIY バイオを行う人々)、学問の表現形式、オープンアクセスとアカデミアなど、話題が多岐にわたった。以下に紹介する。

佐藤:ディスカッション前の自己紹介。専門は図書館情報学で、オープンアクセスについても研究している。学生の時に、機関リポジトリに登録されたオープンアクセス論文がどのように利用されたかという分析を行ったことがあるが、一般の人の利用が多いという結果になった。自分自身は今年が20代最後の年で、2007年に卒業研究を行った。TwitterやFacebook、ニコニコ動画等のソーシャルネットワークサービスを日常的にチェックし、「面白いと思ったこと」を人と共有する意識、行動がデフォルトとなっている。自分自身も「オープン世代」と呼んでよいだろうと考えている。

佐藤:フロアの方から質問を預かっているのでまずそこから進めたい。ご自身の活動について、政府や行政のサポートは必要ないか?

堀川:くれるというなら(笑)

山田:自分の研究は趣味のようなもの。自分が実行委員を務めているニコニコ学会Bは大学や企業との共同のかたちで国の支援する研究拠点に参加している。大学職員でもあったので仕事の中で研究費などに関わる予算を扱う機会もあったが、国からの予算は一般に条件が厳しく、活用が難しい印象がある。

竹澤:オープンアクセスジャーナルの運営には資金は大事なので援助はしてほしい。たとえば今の科研費だと学会には電子ジャーナル出版の費用に対して助成があるが、企業はダメとなっている。幅広い援助の方法を検討してほしい。

佐藤:岩崎さんへの質問。不勉強を承知でお尋ねするが、「本当に好きな研究」で、通常のレガシーな研究費を取るために工夫していることは何か。

岩崎:本当に好きなことを書いて取れなかったら、諦める(笑)生命科学と芸術という、独自のスタンスでこれまでは取得できていたが、だんだん厳しくなってきた。art 方面では海外のファンディングにも申請している。クラウドファン

ディングも利用していきたいと考えている。キャッチーなコピーのできない研究にむしる国のサポートがあったほうがよいのではないかと。

佐藤:クラウドファンディングという点では、SPP(Science Postprint)には論文に寄付を募るボタンがついているが、実際のところこれはどの程度集まるのか。

竹澤:まず、投稿者に寄付を募るボタンを表示するか要望を受ける。約半数の論文に表示されている。実際の寄付行為はまだごくわずかか。

山田:ニコニコ動画の場合はアクセス数などに応じて主催会社から若干の奨励金がもらえる仕組みがある。人気のあるコンテンツになるかどうかのポイント。

岩崎:日本の研究助成事業は省庁縦割りで、助成機関も省庁間をつなぐようなものがない。また分野ということだと、総合大学には美術系の学部がなく、近い距離での相互乗り入れができない。結果として接点がトップダウンでやってくるのが課題だと考えている。

佐藤:駒井さんへの質問。こういう活動を、学会会議にどのようにつなぐことができそうか?

駒井:日本ではまだ政策や学会に取り上げるレベルにはなっていないが、現状でどのような活動が起きているかをひとまずきちんと把握したい。

佐藤:登壇者の皆さまから自分以外のご発表についての質問やコメントをお願いしたい。

岩崎:アカデミアにいる人間として、竹澤さんに感想。査読は一般に、実際の査読内容の文章がどこかに公開されることもなく、(学術活動の一環で大きな時間を割くにもかかわらず)報酬も発生しない。SPPにはぜひそここのところを実現してほしい。将来的に査読者にキックバックを検討しているとのことだがどの程度を検討しているか。

竹澤:まずは論文の公開後査読を実現させる。その上で、査読内容のランキングを行い、それに応じた対価を支払うということを考えている。

岩崎:レビューが公開されて、それを読んだ人が「これはいいレビューだな」というのがわかればより良いと思う。

堀川:竹澤さんに質問。総合ジャーナルであつたらいいなというものを現実に立ち上げている点で素晴らしいと思う。これらはどのように運営しているのか。編集、査読委員の集め方、質の担保などを、限られた予算の中でどのように実現しているのか。



竹澤: 査読者はその分野の専門家であって、雑誌のブランドによって変わるものではないはず(なので、質は保証される)。雑誌のブランディングについては、地道に、査読の仕組みを作り、他の学会ではできないことをやっていきたい。丁寧にやっていけば評価はついてくると考えている。

山田: バイオハッカーについて、生物系は生命倫理面で色々と厳しいはずだが、DIY でバイオ実験や研究活動を行う上でのトラブルや、ケアがあるのかどうか。

岩崎: バイオテロのリスクの可能性なども考えるとそこは常に悩ましい。ただ、今は「これを作ったら何ができるのか」と考えながら実践している段階で、たとえばとんでもないものを作ろうとしても意外と作れない、というのがラボで実感されたりする。その一方で、様々な実験や失敗への対処法などの共有が行われれば、リスクへの対策ともなるだろう。大学や企業が占有してしまうとそれができない。

竹澤: 仕事を持ちながらバイオハッカーになろうと思ったらどうしたらよいか。

堀川: 何らかの方法で場を作ることが重要。仲間を集める、やりたいことをアピールする、土日バイオという人もいるし、まずお金をしこたま稼ぐという方法もある(実際に海外でそういう人がいる)。

駒井: コンベンショナルな研究をしている身として、その中身をもっといろんな人に知ってもらいたいと考えている。ただ、サイエンスカフェのようにアウトリーチでどこか別の場所に出ていかないと知られないというのではなく、普通に知ってもらえるような仕組みを考えたい。岩崎さんのように、身近なテーマとして **fine art** を間にはさむのがよいと思ひ、試行錯誤しているが、なかなか交わることができない。他分野の研究者や一般の人に対する興味の喚起について岩崎さんにお伺いしたい。

岩崎: 相手の研究者側のスタンスに立ったアプローチが必要と考える。科学者のデフォルトは予め与えられた問いがあったり、問いの立て方自体が論文に収斂するようになっていたりする。アーティストの場合は、真っ白のキャンバス(無)の状態から何かをせねばならないというところからスタートする。その上で、プロセスを見せる、哲学的な問い、答えのないことなどに取り組む。そういう意味では、問を立てる訓練はアーティストの方ができているのかもしれない。ただし、**science** も **art** も好奇心から始まっていることには違いないはず。表現方法は論文だけではない。

佐藤: 非常に興味深い話が進んでいるが、ここで未来に向けての話をしたい。研究のプラットフォームや、若手のサポートの在り方についての議論ができれば。まずは前半の司会をされていた榎木さんからのコメントをいただきたい。

榎木: 自分自身は理学部で発生学をやった後、医学部に

入りなおし、現在は病理医。バイオ系の研究状況や、若手研究者問題について関心をもっている。最近の著書『嘘と絶望の生命科学』では、「ピペド」という語(実験のために一日中ピペットをもって実験せざるを得ない現状を表す一種のスラング)を取り上げた。バイオ分野の若手研究者が置かれている状況を象徴しているが、この「ピペド」とオープンアクセスがどう関係するかというと、若手研究者もアカデミアという立場に固執し、現場で追い詰められている。自分自身も、アカデミアから出たら研究できなくなるという思いが非常に強かった。しかし自分がその状況になった1990年代から比べると、2010年代の現在はアカデミアの垣根がかなり低くなってきているように感じる。オープンアクセスが、そのことを可能にしていると感じている。つまりオープンアクセスは、若手にもアカデミアの内外に関わらず研究を続けることができるという希望になっているのではないかと。

佐藤: (垣根が低くなるということは)アカデミアの中にも風を吹き込むことになるのでは。

駒井: 日本学術会議の若手アカデミー委員会も、学術会議のシニアの先生が国際的な動きを踏まえて若手に作ればどうかと促してできた。アカデミアの中でも動きは出ている。

佐藤: フリーの研究者として改善してほしい点はあるか。

堀川: ジャーナルのオープンアクセス化。Nature Communications 誌が完全オープンアクセスになったように。

佐藤: APC(論文加工料)はだいぶ高いですが。

堀川: しかし、ブランド化されたジャーナルがオープンアクセスになると、掲載論文著者のブランディングも可能になる。そういうアピールの方法があってもよい。

佐藤: フリーの研究者はジャーナルには投稿しないのか。

堀川: 特に成果を論文という形にして投稿しなくてもよいのでは。業績をつくる義務はない。

佐藤: 研究成果という点でいうと、芸術系のファンドだと発表形態はどのようになるのか。

岩崎: 美術系で成果をだすようなものもあるが、海外でもっとアバウトな形(ディスカッションなど)でよいようなものもある。

竹澤: 論文雑誌は自由にいろんな人が参加できるようになるといい。高校の科学部などが論文を執筆して掲載できるようになると面白いのではないかと。

佐藤: こういった動きに対して、図書館はどうコミットすることができるだろうか？

山田: 研究成果の収集の役割を果たすためにアンテナを張っておくこと。まだ研究者の中でも手探りの状況にあるだろうから、すぐに具体的にコミットするというのは難しいかと。

もしれない。

佐藤: 知の生産のための環境を提供することができるだろうか。共同ラボとか。

山田: 学内の政治的なこと、それを図書館が担当するかどうかという問題があるかもしれないが、それがクリアされたら可能ではないか。

佐藤: 時間が迫ってきたので最後に登壇者の皆さんからひとこと。

岩崎: いろんな表現があるということを楽しめるようになればよい。それが、(駒井さんのスライドにあった)「科学を文化に」ということではないか。

山田: 前職の大学図書館勤務時代から「知のオープン化」ということに興味があり、退職後にもそれらに関わる活動を

行うことができている。世の中全体として面白い方向に進んで行っている気がする。

竹澤: 論文雑誌を運営する一方で研究不正についても関心を持ち追いかけているが、研究不正防止にはラボノートへの公開が有効ではないかと考えている。ラボノートを図書館に置いて管理するのも面白いのではないか。

駒井: 本来図書館は中枢にあり、コミュニティという観点からも知の創造を促す場所だと考えている。パブリックにいるような研究者に来てもらえる場、コラボレーションオフィスなどがあると面白い。

堀川: 図書館がひとつのコミュニティの場として機能するようになるとよい。

佐藤: 本日はありがとうございました。

-----企画後記-----

😊 今回、企画 WG に榎木英介さんをお迎えして豪華若手研究者の皆様によるセミナーを企画することができました。また佐藤翔さんの軽妙なモデレートにより、パネルディスカッションでは研究や科学についての本質的な議論、話題が次々に現れました。会場にはクマムシさんも 2 匹(?) 同席し、会の進行を見守ってくれました。研究とは本来楽しく、様々な表現形式があること、フリー(アマチュア)の研究者であっても表出するプラットフォームがあれば発表すること、などを伺うことができ、大変興味深かったです。

私自身の興味は、医学図書館での勤務経験から、利害や立場の異なる人々によってひとつの場が共有される状態、ということにあります。オープンアクセスによってその場は広がっていますし、図書館も Web も、あるひとつの場であると考え、今回の内容は、私たちがこれからできることの大きなヒントにもなるように感じました。

土出 郁子(大阪大学附属図書館)

😊 私は SPARC Japan セミナーに参加したこともなく、過去にどのようなセミナーであったかさえよく知らないまま企画に参加いたしました。オープンアクセスがテーマのお祭りだと伺い、ならばお話を伺いたい人、会いたい人を呼ぼうと思い、講師の方々の人選にアイデアを出させていただきました。

岩崎さんは大学院生時代からの知人で、昔から狭い研究者の枠を超えた活動をされていました。もちろん研究も超一流で、しかも自宅に実験室まで持ち、科学と芸術の垣根を軽々と超えた活動をしています。竹澤さんも、生命科学系博士号取得者でありながら、アカデミアに縛られることなく活動されています。そしてクマムシ博士の堀川さんとははや著名人。社会の中で研究するという活動を実践されています。山田さんのニコニコ学会 β の話は、もはや博

士号のような学位さえ無意味になるのではないかと感じさせられました。駒井さんにはアカデミアを代表させてしまって、ちょっと申し訳なかったですが、既存の学術もこうした刺激を受けて変わっていくと確信しています。

オープンアクセスはこうした人たちに力を与え、そして世の中を変えていく基盤になるものだと思います。未来の研究の希望を抱くことができるひと時でした。この熱を未来につなげていくために行動を続けていきたいと思っています。

榎木 英介(近畿大学医学部)

😊 年に一度の Open Access Week、しかもテーマは“Generation Open”ということで、日本国内でパワフルに活動する若手研究者と SPARC Japan セミナー参加者の皆さんをつなげる楽しいお祭りがしたい、と考えていました。いかがだったでしょうか？ 僕自身は、最高に楽しかったです。

研究は楽しいし面白いものだ、それを多くの人と共有しながら進められればもっと楽しい、というのは、自分のような世代の研究者であれば感じている人も多いのではと思います。業績発表へのプレッシャーや既存アカデミアのなかなか変わらない構造がその楽しさを、焦燥感や閉塞感で押しつぶしてしまいそうな昨今ですが、その閉塞感をぶち壊すヒントが今回のセミナーには含まれていたようにも思います。

佐藤 翔(同志社大学)

😊 当日参加された方々がツイッターやブログにてコメントを寄せて下さいました。ありがとうございました。

<<http://togetter.com/li/737570>>

<<http://cheb.hatenablog.com/entry/2014/11/09/225850>>

<<http://medister.info/doctorsblog/?p=1663>>

SPARC Japan 事務局